

第6回公共交通分野におけるオープンデータ推進に関する検討会
議事概要

1. 日時：平成29年11月27日（月）14:00～16:00

2. 場所：国土交通省第2会議室AB

3. 議事概要（委員からの主な意見）：

○今後、スマホ決済やシェアリングエコノミーといったITサービスを軸に公共交通がモビリティサービスとして再編されていき、ユーザーと事業者との間をサービスプロバイダが仲介する世の中となっていく。オープンデータ化により、データがそれらの者の間を血液のように流通するようになる。

○駅の乗り継ぎの利便性向上に向けて、空間をもう少し認識しやすくするためには、基本的なデータをきちんと整えなければいけない。ようやく実証実験という形で、ここまでたどり着いたと感じるところであり、ぜひ成功させていただきたい。

○利用者のゴールは駅ではなく、その先の目的地である。駅の中、周辺だけにとどまらず、その次の二次交通、三次交通との接続となると、バス、タクシーなどの他の交通モードも関係してくる。鉄道を降りてから改札を通して他の鉄道に乗り換える、又は駅の外に出て目的地に向かうまでの全てがシームレスである状態をつくるべき。そういう観点から、エンドユーザー目線でどのようなデータが必要なのかさらに議論する余地がある。

○活用できるシステムは徹底的に活用するというので、国交省で進められているG空間情報センターのデータの整備との連動も有効と考えられる。

○こうした分野で国土交通省が音頭取りとなることはとても重要。個々の事業者が何かしようと思っても、他との調和を図るのは難しい。東京オリ・パラ大会を機会に国を挙げて進めていくという意欲を示すことがとても重要である。

○信頼性の非常に高いデータをリアルタイムで提供するというのは、実はかなりコストがかかる。このコストを誰が負担するのかをしっかりと検討していかないといけない。

○データをどう管理するのかというのも、次のテーマとして考えていく必要がある。単に1つのセンターが管理するというだけではなく、ブロックチェーンを参考にすれば、信頼性が担保できるメカニズムができるのではないかな。なるべく管理の仕組みを身軽にして負荷は最小化していくなど、工夫をしてはどうか。

○駅構内のデータもオープンにしていくことは大変すばらしく、交通弱者の皆様のためにもなる。一方で、データをオープンにしてセキュリティレベルが低下しては本末転倒。オープンデータ化によるリスクにも留意が必要。

○レピュテーションリスクについては、企業からするとリスクだが、きちんとアセスメントしながらサービスを進めていくということに関しては、今後、サービスを出す側がより熟練する必要がある。

○オープンデータにより公共交通事業者がメリットを享受するのはほんのわずかであり、多くのメリットを享受するのは利用者である。その利用者にとってのメリットをどうやって高めるのかということに交通事業者は協力してくれているということを忘れてはいけない。

以上（文責 事務局）